

かへし

大宮の女房加賀

君ををきて立いづる空の露けさは秋さへくる、旅の悲しさ

鹽湯いで、京へ歸りまうで来て、古郷の花霜がれにける哀なりけり、いそぎ歸りし人のもとへ、又かはりて、

露おきしにはの小萩もかれにけりいづち都に秋とまるらん

かへし

おなじ人

慕ふ秋は露もとまらぬ都へとなどていそぎし舟出なるらん

〔宗長手記〕大永六年七月、略中興津左衛門の館し。ほ。風。呂。興行、一七日湯治、略中御門殿御在國、折

ふし興津しほゆ湯治旅宿へ、文にあそばしそへて、

さむき夜はむかふうちにも埋火のをきつることぞ思ひやらる、